遺物の中には東海地方の土器も多く含まれていて、丸子（のちの道嶋）氏出身の上総国（千葉県）の遺跡の状況によく似ています。さらに、副葬品として**「大舎人」**[※5]と墨で書かれた土器や、**革帯**[※6]が発見されています。革帯一式が出土した例は他になく、**貴重な発見**と言えます。現存するものとしては正倉院（奈良県）宝物に例があるだけです。

「大舎人」と墨書された土器

革帯（発見された様子）

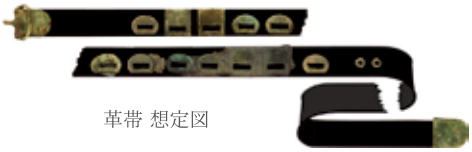
矢本横穴の造営・使用時期は、丸子（のちの道嶋）氏が移住してきた７世紀中頃から、赤井官衙遺跡が役所として機能していた９世紀初めまでであることが分かっています。玄室の奥壁にコンパスで円を描いたような線刻が見つかったものもあります。これは横穴墓の**線刻壁画としては日本最北**の例です。

線刻壁画（28 号墓）

人骨の鑑定によって矢本横穴には**関東から移住した**とみられる人々と、もともとこの地に暮らしていた**蝦夷の流れをくむ**人々が葬られていることがわかりました。両者が同じ墓から発見されることもあり、人骨が語る被葬者像は、律令政府による蝦夷政策の実態を知るうえで、重要な手がかりと言えるでしょう。

埋葬された人骨

儀式に使われた土器


革帯 想定図

静岡県湖西窯でつくられた須恵器

金銅製の耳環

碧玉製管玉

和同開珎

愛知県猿投窯でつくられた須恵器

横穴墓から見つかった遺物

鉄製の馬具

勾玉

水晶製の切子玉

ガラス小玉

金銅製の鞘金具のついた直刀

発見された多くの遺物や副葬品の中には、朝廷との結びつきを示すものがあり、矢本横穴が東北地方最大の豪族丸子・道嶋氏一族や赤井官衙遺跡に関わる人々の墓であったことを物語っています。

※５：公務の使者などに従事した都の役人。貴族の子弟だけがつける役職で、地方豪族の子弟が起用されるのは異例なことであった。

※６：都の役人が正装時に腰に巻いたもの。矢本横穴で発見された革帯の装飾具はすべて銅製。装飾具のひとつである巡方の大きさから、下級役人が着用したものとみられる。